

素根た意氣張、男と違ひ合どんく、流石女子は、春の雪隊長かネ

ーソーカーネー どんく。

水道汲さへ、また初世帯合どんく、赤い襟に、洩れる愛 隊長か

ネーソーカーネー どんく。

○のんのこさいくぶし 本でうし

丸いちヨイく、玉子も、切り様で、四角のんのこさいく合物も

ヨイく、いひ様で、角がたつ、のんのこさいく。

欠

MISSING

長 唄

鞞うづほ

猿ま

『夫れ弓矢の始りは。神代の時より用ひしとかや。まゝつらん金矢
 入れを鞞と名づけしは。其の中空にして。外に毛皮をかけたるは。
 栗の穂なぞに似たればとて。空穂とは言ひ傳ふ『あら不思議やな。
 怪石裂けて石卵生じ。忽ち化して猿となる事は。人を教のたとへ草
 『秋ふく風に笛の音は。合草刈る童子もいづくかど。たよりし先は
 それならで。妻をこひしと鹿笛に。へだてられたる溪川へ。散りし

紅葉も時雨にぬれて。どけて嬉しき 倉雪の昏おもしろや 三下り早
 あら王の春ぞ来る。ぞめき囃せし 倉殿も家來も 倉ほのめく顔の
 よい緋ざくらの向島。土手の錦も 倉花の空。竹屋くと呼ぶ舟に
 乗合せたる 倉猿廻し。こなたの岸へと 倉つきにけり 本願寺 太郎
 冠者あるか 『ハア御前に候』あれに背負ふた逸物を。いづくへ伴ふ
 なるか 倉尋ねて参り候へと 『仰に冠者は心得て。のうく猿曳と
 まれとこそ。其の猿いづくへ引き候やと言ひければ』賤の男はハア
 と手をつかへ、やつがれは此の邊に住む猿曳にて候が。今日のお旦
 那廻りを致さうと存じます。心急げばやつがれは。そろりくと

参らうか 『やれ待たうぞ猿曳。この方はかくれもない大名でありや
 る。今日は春野の遊にて。弓矢をかたげ狩に参つたるがあれに持せ
 たる鞆を。ないく毛皮にしよふと思ふ折柄。よい猿に逢ふたその
 猿の皮を申受たしと』聞て驚く猿曳が。猿の皮をお好みとなし。そも
 やそも生きて居るもの。皮が何とてあげらるゝで御座らうが。此
 の猿をもちまして。ひと日くの命送ります。是をあげましては翌
 日より何の手業なし。こればかりはお許しと』詫るに聞かぬ大名の
 威を張つめし強弓の。ひと矢に射てと立かゝる 『あゝもし待つて下
 さりませ猿の皮が御用ならば御手を下し。射殺されましたは皮に疵

がつき。爰に猿のひと打と申ましてひと打にて命のうせる所が御座
 るによつて。殺して進ませせう「太郎冠者も心得て。早うくと進
 めけり」またあるまじき殿の御意。畜類なれどもよう聞けよ。小猿
 の時より飼ひ育て。今更憂目を見る事は。不憫な事で。合「今うつ程
 に草葉の蔭にても。恨と思ふて呉るゝなよ。合「あれ是非なしと振上
 ぐる鞭の下。まはる小猿のいぢらしさ。合「あれ〜今のを御覽なさ
 れましたか。打殺さるゝ鞭とは知らで。船漕ぐ真似を任まするぞ」何
 殺さると知らいで。蕪をするとは不憫な事だ。やい太郎冠者。うつ
 など言へ〜連れて歸れと申せへと「聞て喜ぶ猿曳が。唯有難しと伏

拜み。合「此の上は御禮に。猿にひと舞まはせませうと。合「聲張上げ
 ニより」エ、イ猿が参つてこなたの御知行。まさるめでたき能仕る
 合「猿は山王まさるめでたき目出度さよ。合「天より寶が降りくだつ
 て。増生すれば綾や千反。錦や千反唐織物よ。合「地には黄金の。合「
 花が咲候實に豊なる時なれや。合「げに豊なる時なれや」さらば我ら
 は御暇と。元來し道へ歸らんと。合「花を見すて、歸る雁。空も高根
 の不二筑波。名にあふ隅田の春の夕景色をこゝにとめけり。景色
 をこゝにとめけり。

傀儡師

「浮世の業や西の海。汐の蛭子の里廣く。國々修業の傀儡師。連に
 離れて雪の下。椿にならふ青柳の雫もかるき春雨に。かくやをかぶ
 り通るにぞ「塀構へなる窓の内。呼かけられて床しくも。立止れば
 麗しき。女中の聲にて傀儡師。一曲舞はせと望まれし。詞の下より
 取敢す。聲悪しければ箱鼓。拍子とりく人形を敷多出してそれそ
 れど。唄ひはるころ可笑けれ二上り」小倉の野邊の一本薄は。いつか
 穂に出て尾花と成らば。露がねたまん懸草の。積りくつて足曳の。

山猫の尾のながく。一人かも寐ん淋しさに「夕べ迎へし花嫁様
 は。鎌もよく切干草も靡く。心よさをなかみさまじや。おらが女房

京鹿子娘道成寺

三下り「鐘に恨は敷々御座る。初夜の鐘を撞く時は。諸行無常と響く
 なり。後夜の鐘を撞く時は。是生滅爲樂と響くなり。聞て驚く人も
 なし。我も後生の雲晴て。真如の月を詠め明さん二上り「言はず語ら
 ぬ我が心。亂し髪の亂るも。つれないは唯移氣な。どうでも男は
 悪性者「櫻々と飄はれて。言て袂の譯二つ。勤さへ唯うかくと。

とうでも女子は悪性者。都育は蓮葉なものぢやへ。戀の別ざと武士
 も道具をふせ編笠で。張と意氣地の吉原。花の都は歌で和らぐしき
 島原に。勤する身は誰と伏見の墨染。煩悩菩提の撞木町より。浪花
 四筋に通い木辻に。禿立から室の早咲。うれがほんに色ぢや。一イ
 ニウ三イ四ウ夜露雪の日下の關路も。共に此身を馴染重ねて。仲は
 丸山たい丸かれと。思染めたが縁ぢやへ『梅とさんく』櫻は何れ兄
 やら弟やら。わきて言はれぬ花の色へあやめ杜若はいづれ姉やら妹
 やら。わきて言はれぬ戀ぞ増すべさよおへ。可愛らしさの花始「戀の
 手習いつ見ならいて。誰れに見しよとて紅鏡漿つまよぞ。みんな主

への心中立。オ、嬉しく。末は斯うぢやに然うなるまでは。とん
 と言すにすまそぞへと。誓紙さへ偽か嘘か誠か。どうもならぬ程逢
 ひに来た。ふつつり格氣せまいぞと。嬌んで見ても情なや。女子に
 は何かなる。殿御くの氣が知れぬ。悪性なく氣が知れぬ。
 恨みくかこち泣。露を含みし櫻花。さはらば落ん風情なり『面白
 の四季の眺や。三國一の不二の山。雪かど見れば花の吹雪か吉野山
 散りくるく』嵐山朝日山くを見渡せば。歌の中山石山の。末の松
 山いつか太江山。いくのの道の遠けれど。戀路に通ふ淺間山。ひと
 夜の情有馬山。いなせの言の葉あすか木曾山待乳山。我が三上山祈

り北山稻荷山。縁の結びし妹脊山。二人が中の黄金山。花咲るいこのく姥捨山。峰の松風音羽山。入相の鐘を筑波山。東叡山の月の顔。三笠山只頼め氏神様が可愛からしやんす。出雲の神様と約束あればつい新枕。廊に懸すれば浮世ぢやへ。深い仲ぢやと言立て。こちや〜〜よい首尾で憎らしい程いとらし「花に心を深見草園に色よく咲初めて紅をさすが品よく姿よく。あゝ姿優しやしほらしや。さあ〜〜そふぢやいな〜。皁月五月雨早乙女〜。田植唄〜。裾や袂を濡したさつさ花の姿の亂れ髪。思へば〜恨めしやとて。龍頭に手かけ飛よと見へしが。引被いでを失にける。うたふ

も舞ふも法の聲。エ・何でもせい〜。春は花見の幕を床しき。夏は屋形の舟ゆかし。よい〜よい〜ありやりやこりやりやよいと。秋は武藏の月ぞゆかしき。冬は雪見の亭ゆかし。よい〜よい〜ありやりやこりやりやよいと。浮に浮れて第一宙宇に迷ふた。懺悔〜六根罪障。南無不動明王〜。ア・何でもせい〜。動くか動かぬか。なまぐさばんだばさらんだ。こりや動かぬぞ眞言秘密でせめかけ〜。珠敷のありたけやつさらさ〜。せんだまかろしやな仲のこつちやへ。そはたらうんたら何のこつちやへと祈りける。一隠請東方青龍清淨隱請西方白體白龍。一體三千六千世

界の恒沙の龍王哀感納受哀感自護のみきんなれば。何國に恨のある
へきと祈り祈られ飛上り。御法の聲は金色の花を降らせし其の姿
實にも妙なる奇特かや。

賤機帯

木蘭子「名にし吾妻の隅田川 倉その武藏野と下總の。詠へだてぬ春
の色。櫻にうかぶ 倉不二の雪 倉柳に沈む筑波山。紫匂ふ八重葎
倉錦をこゝに都鳥。古跡のわたりなるらん「春もくる空も霞の瀧
の糸。亂れて名をや流すらん「笹の小僧の 倉風いとひ 倉花と愛

でたる幼童子が 倉人商賈にさそはれて 倉行方いづくと白木綿の
神に祈の 倉道たづね 倉浮て漂ふ岸根の舟の 倉焦れくいていざ
言問はん。わが思い子の 倉ありやなしやと狂亂の 倉正躰なきこ
そあやなけれ「船人は是を見るよりも。ヨイ慰みと戯れの 倉氣ちが
ひよと手を打たき 倉はやすにぞ「狂女は聞いて振かへり。ア、
氣違とは 倉曲もなや「物に狂ふはわればかりかは 倉鐘に櫻のも
の狂ひ。嵐に波いもの狂ひ。菜種に蝶の 倉もの狂ひ 倉三つの摸
様を縫にして。いとし我が子に着せばやな。子を 倉綾瀬川名にも
似ず心關屋の里はなれ 倉縁の橋場の土堤づたひ。往きつ戻りつ 倉

爰かしこ 合尋ぬる我が子は何處ぞや 合教へてたべと夕潮に「船
 長猶も拍子にかゝり」『それその持たるすくひ潮に 合面白う花をす
 くひなば 合戀しと思ふ其の人の在處を教へまわらせん』何おもし
 ろう花をすくへとか 合いでく花をすくはん『あら心無の川風や
 な。人の思ひも白波に 合散り浮く花を 合すくひ集めん。心して
 吹け 合川風 合沖の 合鷗のちりやちりく。むらくはつと
 く亂るゝ 合黒髪も取上げて結ふ人もなし』船長今は氣の毒さ。
 何がなしほにと立上り二より『そもさてもむごりよは誰人の子なれば
 合何程の子なれば 合尋ねさまよふ其の姿 見る目も愛しと練む

れば『音頭く〜と戯れの。鼓の調ひさしめて 合羯鼓を打つて見せ
 うよ『面白の春の景色や。筆にもいかで盡さん。霞のまにはかは櫻
 雲と見えしは三芳野の。吉野の川の瀧津瀬や「風に亂るゝ 合糸さ
 くら 合いとし可愛の 合兒櫻慕ひ重ねし八重櫻。一重櫻の花の宴
 いとしらし』千里も薫る梅若や『恵を仰ぐ神風は。今日を日よしの
 祭御神樂。君が代を 合久しかれとぞ祝ふ氏人。』

淡 島

本調子「タハ〜」の品定め。仕着小袖の一樣に。着連てつれて。つれ

てさわたる雁がねの。空さへ秋。定めなき。浮世を渡る其の中に。
 合「かた淡島の修業者の、離が許に鈴の音の、ふられくで逢はれぬ戀も。願へばいつか淡島せんとの御誓願。女郎衆の張の強いのもつい折針やうち解て。仲を結ぶの。合しめ括り。さる浮世袋の花形や。雛形並ぶ妹と脊を。結の神とは是ならん「抑も紀州名草の郡。加田淡島大明神の。由来を精しく尋ね奉るの。せんしうな大盡の初會に嵌つて裏約束。第三會めの姫宮にて。張さへてれん女郎と申奉る。本地は即ち虚空むでん御容色にて。良の御方は一代男を守本尊を掛けて。腰より下が地につかず。とんとはまるが浮世川。うつを

船やら山谷船。異見で何の山屋が豆腐の耳に残りし睦言かごと。言葉の稜の巻煎餅。御神樂太鼓の辛味噌は。味食ひしめての居續に。永い不埒の病となつても。金をば水淡島と。遣はせんとの御誓願。天上界の一と廓。手練手管のよこばんじん。敬つて申すと戯る。合「君は春咲く梅の花。合「薫ゆかしき閨の戸に。合「ハテ戀ぢやもの。小六小ろくくついたる竹の杖。合「元は尺八中は笛。未は女郎衆のヤツコリヤ夫戀ふ鹿の筆。おのが名のみをうたかたの淡島なりと戯れに。人々興に人相の。かねてもうけの月の昏。樂しかりける次第なり。

其面影二人椀久

「たどり行く。今は心も亂れ候。合末の松山思の種よ。あのや椀久はこれさく打こんだ。兎角戀路の濡衣二上り」ほさぬ涙のしつぽりと合身に染みぐと可愛さの。それが嵩じた物狂。とても濡れたる聞なりやこそ。合親の異見もわざくれと。兎角耳には入相の。合鐘に合圖の廓へゆこやれく。さつさ行こやれ昨今は今日の昔なり合「ぼん様くちとたしなまんせ。墨の衣に身はそみもせで。合戀に焦るゝ身は浮舟の。合よるべ定めぬ世のうたかたや。ゆかりぼう

しの其のひと節に。合智慧も容量も皆淡雪と。合消ゆるばかりの物思ひ。ひとり焦るゝ獨り言。戀しき人に逢はせてみや。合兎角心の遺瀨なき。身の果何と淺ましやと。暫しまどろむ手枕は。此頃みするうつなう。合行く水に。うつれは變る飛鳥川。合流れの廓に昨日までセリフはて「勿躰つけたへ。誓文ほんに全盛も。我は廓を放し鳥。合籠は恨めし。合心くどくあくせくと。戀しき人をまつ山は。やれ末かけてかいざりしやんと。しやんくともしほらしく。君が定紋伊達羽織。男なりけり又女子なり。合片袖主と眺めやる。『思ひさしなら武藏野でなりと。何んぢやおりへの薄盃を。よいさ

しやうがへ武藏野でなりと。何んぢやおりへの薄盃。よいさしやうがへ。戀に弱身を見せまじと。ひんと強ねては背むけて合くねれるはなど出て見れば。合女心の強からで。跡より戀のせめ來れば。小袖にひたと抱きつき。申し腕久さんあり。『さつてもてつきりお一人さま鼓歌ふられず歸る仕合せの。松にはあはぬ太夫が袖。月の漏るより闇がよい。合いゝやいや〜こちや闇よりも月がよい。お前もさうかと寄添へば。月がよいと言ひ草に粹な心で腹が立つわいなセリフ』もうこれからが口舌のたん『仔細らしげに座をうつて。袖尺着尺衣紋坂。初冠の投頭巾。語るも昔男山。筒井筒井筒にかけし

まろがだけ。老いにけらしもないも見ざる。合間に詠みて贈ける程に。其の時女もくらべごし。振分髪もかたすぎぬ。君ならずして誰があぐべきと。互に詠みし故なれば。筒井筒の女とも聞えしは有常が娘の古き名なりしぞセリフ『あゝ古い〜女郎買も盃が辛うなつた』「お茶の口切たぎらす目元にとりつけばセリフ『あゝなんぞいな』手持無沙汰に拍子揃へて業くれ。按摩けんびさ〜。さりとはひさ〜いねろ。合『自體某は東の生れ。お江戸町中見物さまの。馴染情の御最負つよく。按摩けんびさ朝の六つから日の暮る〜までセリフ』さりとは〜忝けない。按摩冥利に叶ふて嬉し。合按摩けんびさ〜。

「さりとのみうら女郎様ちるごちる。袖をそつと引ばおゝ靡きやれ
 かんまへてよいゝ女郎の顔をしやるな。ちるごちる。二人つれた
 ち語るもの『廓々は我家なれば。遣手禿を一所につれたち急ぐべし
 遊び嬉しき馴染へ通よ。合戀に焦れてちやくとちやくと行こや
 れ。合可愛がつたりがられて見たり。無理な口舌も遊びの品よく。
 彼方へ言ひ抜け此方へ言ひ抜け。裾にもつれてじやらくらくしじ
 やらくらくゝ悪酒落の。花も實もある仕こなしは。一重二重や三重
 の帯。蒲團の中を候かしく。」

教 草 吉 原 雀

「凡そ生るを放すこと。人王四十四代の帝。くわうせう天皇の御宇
 とかよ。養老四年の末の秋。宇佐八幡の託宣にて。諸國に始まる放生
 會。本朝于『浮寐の鳥にあらねども。今も戀しき一人住。小夜の枕に片
 思ひ。可愛心と汲みもせで。何ぢや何やら憎らしい鼓鼓其の手で深
 みへ濱千鳥。通ひ馴れたる土堤八丁。口八丁に乗せられて。沖の鷗
 の二挺立三挺立。素見ぞめきて目白押。店清掻のてんてつとんさつ
 さ押せゝ。一馴れし廓の袖の香に。見ぬやうで見らやうで。客は扇

の垣根より初心可愛く前渡り。サアまた又来た障りぢやないか。又
 おさはりかお腰の物も。合點かそれ編笠も其處に置き。二階座敷で
 御座りやす。早盃持て来たところへ。靜かにお出なさんしたかへと
 云ふ聲に。ぞつとしたしんぞ貴様は察ても覺のても忘られぬ。笑止
 氣の毒またかけさんす何かけるもんだへ三下りさうした黄菊と白菊
 の。同じ勤の其の中に。外の客衆は捨小舟。流れもあへぬ紅葉ばの
 目立つ芙蓉の分へだて。たい撫子と神かけて。いつか廊を離れて紫
 苑。さうした心の鬼百合と。思へば思ふと氣の石竹になるわいなア
 末は姫百合男めし其の樂しみも薄紅葉。さりとはつれない厨窓と。

垣根にまるとふ朝顔の離れ難なき風情なり 東雲かことが過し口説
 の仲直り「ひとたさくゆるなかうどの。其のつぎこころ縁のはし。
 そつちの性が憎い故。隣座敷の三味線に。逢は悪洒落まさなごと。
 二より「女郎の誠と玉子の四角。あれば晦日に月も出る。しよんがい
 な。玉子のよほいほいしいよほいほいくよほいほいほ。玉子の
 四角あれば晦日に月が出る。しよんがいな。ひとたさはお客衆へ。
 君の寐姿窓から見れば。牡丹芍薬百合の花。しよんがいな。つけ差
 はこつちやかへエ。「腹が立つやら憎いやら。どうしやうかうしや
 うにくむ鶏籠曉の明星か。西へちろり東へちろり。ちろりくする

時は。内の首尾は不首尾と成つて。親父は十面嘴は五面十面五面に白眼みつけられ。いなうよ戻らうよと云ふては小腰に取付いて。ならぬぞ。いなしやせぬ。此頃のしなし振。憎つくいおさんがあるわいな。一文のたよりにナア今宵ごんすと其の噂。いつものんびも主さん。野暮や事ぢやが比翼紋。離れぬ仲ぢやしよんがへ。うまる縁の面白や。實に花ならば初櫻。月ならば十三夜。いづれ劣らぬ粹同士の。あなたへいひぬけこなたのたて。いづれ丸かれ候かしく。

喜 撰

「我が庵は。芝居の異常盛町。而も浮世を離れ里。世事で丸めて。

浮氣でこねて。小町櫻の詠に飽かぬ。彼奴にうつかり眉毛を誂まれ

「法師くは啄木鳥の。素見ぞめまで歸らりよか。鳥わしは瓢箪。

合「浮く身ぢやけれど。主は餘の取り所。合「ぬらりくらりと今日も

復。浮れくして来りける。若しやと簾を余處ながら。合「喜撰のはな

が。合「茶の給仕。浪たつ胸を押撫でて。締りなけれど鉢巻を。幾度

しめす水刷棒。濡れて見たさに手を取て。小野の夕立縁の時雨。化

粧の窓の手を組んで。どう見直して胸振り。合「今日の御見の初昔。合

悪性ど聞いて此の胸が。魔の月や松の影。私や御前の政所。いつか

果報も一森と。褒められたさの身の願「惚れ過ぎる程愚痴な氣に。心の底の知れかねて「自烈度では「ないかいな。何故惚れさせたこれ姉女「自惚すぎた悪洒落な。わつちもそれなら勢肌。五十五貫でやらうなら「廻りなんしへ。ぐわらぐ鐵棒に 合「路次はしまりやす「長屋の姉女が。鐵砲絞の半襟か。花見の煙管ぢやあるめへし。素敵に首に搦んだは。廊下蔭が油揚さらひ。お隣の華魁へ。知ねへ顔もすさまじい。何だか高い觀音さんの「鳩は五十や三重の。塔の九輪へとまりやす「粹と言はれて浮た同士「ヤレ色の世界に出家を遂げる。ヤレくくく細かにちよぼくれ「愚僧が住家は京の巽

の世を宇治山とは。人は言ふなり。ちやくくちや茶ゑんの咄す濃茶の縁の橋姫。夕べの口舌の袖の移り香。花橋の名小島が崎より。一散走りに走つて戻れば。内の唄が格氣の角文字。牛も涎を流る。川瀬の口説けば内へ。我から焦る。笠を集めて手管の學問「唐も日本も廓の懸路が山吹流しの水に照添ふ旭のお山。誰でも彼でも二世の契は平等院とや。さりとて是はうるさいこんだに「奇命頂禮どら如來「衆生手だての歌念佛「釋迦牟尼佛も床急ぎ。抱いて涅槃の長枕。睦言がはりのお經文「なまいたくく 合「何故に届かぬ我が思。ほんにサ「忍ぶ懸には如來まで。來て見やしやんせ阿彌陀笠。

黄金の肌で有難や『なまいだ〜』 鳥何故に届かぬ我が思はんにサ。こゝに極る樂しさよ『難波江の片葉の葦の結ばれか〜』
 アレサコレハサ『解てはぐれて逢ふことも。待つに甲斐ある』ヤンレ夏の雨『やあそこせよいやな』ありやりや『これはいな』この何でもせ『住吉の岸邊の茶屋に腰うちかけて。ヨイヤサコレハサ』松で釣ろやれ蛤を。逢ふて嬉しき。合『ヤンレ夏の月』やあそこせよいやな『ありやりや』これはいなこの何でもせ『姉さん音上かへ。鳥田金谷は川の間。旅籠は鏡でお定り。お泊ならば泊らんせ。お風呂もどんぐ〜わいてある。障子も此頃張替へた。鳥壘も此頃替へてあ

る。合『お麻間の伽をまけにして』草鞋の紐の仇解の。結んだ縁の一夜妻。あんまり悪うも。合『あるまいかても』さうだろ〜さうである。『住吉様の岸の姫松目出度さよ。いさめの御祈禱。天下泰平國土安穩目出度さよ』來世は生を黒牡丹己が産へ歸り行く。

鳥羽繪

どつこい〜たぞ。〜たぞどつこい。オットそこらは瓢箪で。おさへて見ても。合『ぬらり。合』ぬらり。合『ぬらりとどつた。どこまかしてよいとこな。迷しやせぬ』譯も何やら繪に書た。合『鳥羽繪といふ

も仇つきの仇な文句でやつてくりよ『思ふお方のお聲はせいで。揚
るお客の「面憎や」「私は始めてそんな事」「聞いて嬉しき初雁の文に
も釘のにちり書」「見えぬ按摩や醫せのぼう 鳥己待の晩の 鳥暗が
りが「味な縁では 鳥ア、あるまいか 鳥ア、ラあや獅子の十六文
で。九官鳥は見たれども。摺り小木に羽根が生へて。鳥羽繪はほん
に我ながら。オヤ馬鹿らしい」「いでや捕へて呉れんすと 鳥足を延
ばして取らんとすれば 鳥鳥はついと飛で逃た 鳥エ、あつたらも
のを。傍にありあふ釣瓶棹。ねらひすまして身づくろひ』『お前餌差
か 鳥知らねども 鳥私やれん木の鳥ぢやもの、御縁ござらば今度

くく来てさしねへ『可笑らしそりや来たくくく』『行列捕へて
鳥振込めく 鳥よんべも三百はりこんだ 鳥裸で道中がなるも
のか 鳥あれはさのさこれはさのさ。よいくくくくよやまかせ
面白や『戯れ拍子に浮れ来て 鳥瓢箪から胸が出た『滅想なく 瓢
箪で胸に打乗り 鳥しやんくしやく。浮に浮れて走りゆく。

後の月酒宴鳥臺

『神樂囃して町々廻る。同じ世渡り梅さくや『笠の中さへ覗かれて
人も見送る愛嬌はてんとおてんど。天から落ちた天人か『わつちや

厭やの何馬鹿らしい。とても色にはこんな身で。成駒屋ならそれこそは「此方も首たけ濱村屋。なぶらしやんすな世は情。旅ぢやなけれど道連に。なるとはなしの後や先」えつちら越後の山坂越えて来て見りやはんに江戸の花。いつも黄金の眞盛り「花に浮れりや喉さへかはく。酒になほしやさりとては、まだくイヤハよいとなく獅子の洞入洞返り。すめじや互の思ふこと「岩木ならねば恥かしの森の鳥か驚ならせめて。ひとつ罫のオ、嬉し「待な町々御最負の若者ぞだてる通りもの、さばくは年の高麗屋。宵の媒人花に酒。持せて奥へ走り行く「こんな無様の眞實は。御前のお氣に入りたさの。

嫌の思も天とやら。どうで女房にやなられぬけれど。せめて優しいお言葉にあまへた女子ぢやないかいな「言ふてもお呉れな月がたの田舎者ぢやとお黻か。思ひ比べをせうならば浅間の煙と煙草のけむり。矢庭に惚れた正直男「また嘘らしい眞顔で人をたまさかも「ほんにさうなら山の奥「千尋の海の離れ島「二人暮さば都も同じ「嬉しい世帯で有るぞいな「あるは厭なり思ふはならの木賃袋さへまだ取れぬ。遊び過して風邪ひいた。うつかりのろさのお恥かし「ほんに茶かした獅子舞さん。わつちもそんなら地廻りの。傳法肌で素見の。投筒「親兄弟に迄見はなされ。あかの他人の傾城に。可愛がられ

ふ筈はなし。オヤ「聞いたやうだよ」「維の清掻せつかいで。掻き廻したるでんでつとんだ間夫と客「仇な戀路の色里通ひ。夜は軒端に立つくすエ、待はいな部屋の目顔があるわいな。無理な首尾して逢ふたが憎いかへ。去りとては戀には粹も愚痴になる。是は五色の色のはか。奥柴田五萬石あらそとまよよ」「新潟通ひがやめらりよか。「ささく悪性が浮世にや徳で。ぬまり地蔵へ色の願既足参りの土踏す」「内の噴殿疳癩おさへて。夜まも晝まも三度ぐり」「さのせく」のせつせのせ。せつたら黄粉の稗園子搦てはし「沖のへ沖の題目波に浮んで風に揺られて」「朝日にかやく夕日がたなびく」「南無法蓮

明の鐘

華經「あじよだか當世ひねりが流行る。客が女郎衆の機嫌さづまも逆さ竹「さいばま三里をのるとても」「米山三里を乗るものか」「さまはナへハツ目のある鏡の性で」「ぬらりくらりと氣が多い」「國の訛の笑ひ草「身のすぎはいと八百八品」「八百八丁御最負の「お惠願ふ。「お取立「仰ぐ舞臺で千代の壽。

「宵は待ち。そして恨みて曉の。別れの鶏と皆人の。合「憎まれ口なあれ鳴くわいな。聞かせともなき耳にても。鐘は上野か浅草か。

五 大 力

「いつまで草のいつまでも。なまなかまみへ物思ふ。假令堰れて程
経るとても。縁と時節の末を待つ。何んとしよ。互の心うち解けて
表面はとかぬ五大力。さは去りながら。變る色なき御風情。懸て逢
ふぞへ語るぞへ。惜しき筆とも候かしく。」

くろ か み

三下り「黒髪の。結ばれたる思には。解けて遊た夜の枕とて。獨寐る

夜の仇櫻。袖は片敷つまぢやといふて。倉愚痴な女子の心も知らず
しんと更たる鐘の聲。夕べの夢の今朝覺めて。床し懐しやる瀬なや
積ると知らで積る白雪。

傾 成

本調子「戀といふ。文字の姿を判じ物とけて思の種となる。鐘は上野
か浅草か。其約束を待つ宵の。風も浮氣な仲の町「根こして植えし
合「初ざくら 倉移り氣な色も香も。とめて素足の八文字。昨日の
夢も夫れなりに。袖にたゝんで袂に忍ぶ。聞夫の名宛を結び文。か

しくと書いて又かへすくも。筆に言はする八重山吹を投入の。床へ
 さし込む鷹月。檀子まで來で行く雁に。ちよつと恨を言ひ掛かり。
 言葉もつれて胸すくし。鶏の鳴くまで待せて置いて。何處の女郎奴
 と。しげりくさつて徒な「エ、手管か洒落かそんなその野暮な口舌
 は奥二階。禿が目配のみこんで。味なそぶりの宵の客「傾成の誠と
 雪に黒いはないものぞいの「まだ言はんすか仇口と。ふつつりつめ
 れば振り切る腕「障子襖に音信て。廊下をすべる上草履「桐箆も
 何處へやら「戀ひいさかふて。互に思の十寸鏡「わりなき仲の歳や
 二下り「風薫る袂も軽き夏衣。干すてふ色と疑ふた。岸の卵の花咲く

につけ初音またるゝ時鳥「よい〜よんやさ「〜「あれ圍の戸を
 ほと〜と。叩く水鶏にたまされて。鳥枕もどらぬ蚊屋のうち。あ
 けて辛氣な輪銅舟「よい〜よんやさ「秋の三日月くまもなく。鳥
 はれて逢ふ夜の月の顔。會いふも恥かし廿日の月の。残るを曉迄も
 待ち明す長月や「雪の肌はゆく。美か霜のうす化粧通ひ廊を見
 返りの。一本柳しぐれ〜て。

供 奴

してこいな。鳥やつちやしてこいな今夜のお供。ちよつと遅れて出掛け

たが足が早いに我が折れ。田圃は近道見はぐるまいぞよ合點だ。倉
 振つて消しやるなだい提灯に御定紋つきでつかりと。ふくれた紺の
 だいなしは。伊達にきなした奴等さ。武家のかたぎや奉公根性。や
 れさていつかな出しやしよない。胼や鞆腫や脛に。不二の雪ほご
 あるととも。何時限らぬ。倉お使は。かゝさぬ正直正道者よ。脇よ
 れ頼むぞ脇よれと。急ぎ廓へ一目散。息をさつてを驅つける。『おん
 らが旦那は廓一番隠れない。丹前好み。華奢に右したる腰巻羽織
 さりんとしやんとしやんとさりと高股立の袴つき。跡に下郎がお
 草履取つて。夫れさ是れさ。倉小氣味よい。六法振が。『なには師

匠の其の風俗に似たか。『似たぞ似ましたり扱々な。寛潤華麗な出立
 『おはもじながら去る方へほの字とれの字の謎かけて。ほどかせた
 さの三重の帯。解て寐る夜は免さんせ。ア、儘よ浮名がどうなると
 人の噂も七十五日。てんとたまらぬ。倉小褌とりやつた其の姿。見
 初め。目目が覺めた。さめた夕べのけん酒に。倉ついで。さ
 くれた盃はりうちゑいはまでんす。倉くはいと云てはらつたはつた
 けんびさちり。ちりけいのめやいとがくつきりと。倉捨ち切りお
 いぞが眞白で。手つ首手の平しつかと握つたいしづき。こりや。く
 成駒やつとこよんや。『浮れ拍子にのりが来て。ひよつくり旦

那に捨られた。うろたへ眼で提灯を。つけたり消したり灯したり。揚屋が門を行きすぎる。

手ならひ子

『今を盛りの花の山。來ても三芳の花の蔭。あかの暎の可愛らし。遅櫻まだ苔なり。花娘寺子戻りの道草に。てんと見事な色櫻。ひな草結ぶ島田鬘。はしたないやら戀しいやら』肩縫ひ上のしどけなく紙捲りくひ切る縁むすび。ほぞけかゝりし羅子の帯。振の袂のこぼれ梅。花の笑顔のいとしらし。ふつた文字から書そめて。格氣恥か

し角文字の。すぐな心のひと筋に。お師匠さんのおつしやつたを。ほんに忘れはせぬけれど『ふつつり格氣せまいぞと。矯んで見ても情なや』また娘氣の跡や先。あづまへ。もなきあとなさは。粹なりなり目に立つ娘『娘々たくさんにさうに。言ふてお呉れな手習覺へ琴や三味線踊の稽古』言はずかたらぬ我が心。亂れし髪の亂るゝもつれないは唯移り氣な。どうでも男は悪性者』さくらく〜 穢はれていふて袂のわけ二つ。勤さへ唯うか〜と。どうでも女子は悪性者。東育ちは蓮葉なものちやへ『戀のいろはにはの字を書いて。それで浮名のちりぬをむか。よたれそつねならむうの心おく山けふ

こわて逢ふた夢みし嬉しさに。飲めどもさうに酔ひもせず京を離路
 の清書なり「つまの爲とて天神様へ願かけて。梅を断ちます明白サ
 ア。われ一代断ちます明白。梅をく断ちます明白。サアわれ一代
 實ほんに。さうぢやいな品もよや「諸鳥の啼り。梢々の枝にうつり
 て。風に翼のひらくく梅と椿の花笠着せてく。眺めつさせぬ
 春景色。

かむろ

「戀の種蒔き初めしより色といふ。言葉はいづれ此の里に 舎殿こ

もりし一と麻丸い世界の粹の世に。嘘とは野暮の誤ど。笑ふ禿の
 しほらしや「禿々どたくさんそうに。言ふてくだんすなこちや華魁
 に戀の諸譯や手管のわけも。教へさんした筆の綾。よう知ると思は
 んせ。ヲ、恥かしや恥かし。しどけ態振可愛らし「文がやりたやあ
 の君さまへ。どりやちがへて餘の人に。遣るな花のかのさまの。サ
 ア花のかのさまの手に渡せ「朝のや六つからく上ぎぬ下ぎぬひつ
 重ね 舎禿は袖の振り始め。つくくくには羽根をつく。一イ二
 ウ三イ四ウ五重に七重に。ことは十三十四十五手はまあく二十一イ
 ニウ三イ四ウ 舎見よならく松をかざして梅の折枝。それさこれ

さそれすいた三味の手「梅は匂よ櫻は花よく。いつも眺は不二の
白雪。」

晒 女

「とめて見よなら菜種に胡蝶。梅に鶯松の雪さてはせなちよが袖袂
しよんがいな。色氣白齒の團十郎娘。つよいくと名にふれし。お
金が噂高足。『また男には近江路や。晒盃のたかなぶらうと。戀ぢ
やいや〜角力でならば。相手撰ばすすわり合ひ。ありやありやあ
りや〜〜よいやさ。四つとはさとのこのつ時よ。十三夜には

雨にて月も。なげの情のもりくみづ「面白かるではないかいな「力
だめしの曲持は「石でござんせ「儀で御座れ〜にさしきつて五十五
はなんのその。中の字さめし若衆も。女にや出さぬ力瘤「はんに
ほふやれ逢ふ夜はおかし。折をみつみの文さへ人目。關の清水に心
も濡れて「今宵かた〜におひそのまつと。へん事しづかき待たせて
置て。又成じやと心で笑ひ。嘘をつくまのあた憎らしい「更て今頃
三井寺は、何處の田うると寐くさつて。夢さめが井の鳥籠の山「こ
ちいやばしの一筋に。ほんに粟津のかこち言。思ふ大津は初秋に。
「かじみしゆゝの盆踊「天の川はしの契も岩橋の。明る佗しき葛城

の。神ならぬ身は末かけて。よいやなく『せむしの上も鶴の。橋
 トに立つ笛竹も。一節切とは聞づらき。八聲の鳥にせかれては。よ
 いやなく『たきものひめの移香を『麻衣ながらの起別れ』よいや
 なく『さこの一夜を縁結び』野路の玉川はぎ越へて。色ある水に
 さらしのや『さらして振を見せまいかせう』立浪がく瀬々の
 網代にさへられて。流るゝ水をせきとめよ〜さつさ。車の輪がさ
 れて〜何れ思ひはとなたにも〜『晒細布手にくる〜』晒細
 布手にくる〜と。いざや歸らん賤が庵へ。

西 王 母

『國豊か三皇五帝の昔より。今此の御代に至るまで。かゝる聖主の
 ためしこそ。あら有難の時代なれ〜『桃李不言春幾千の歳月を。
 送り迎へて三千年に。なるてふ桃の花の顔』露に色香も十寸鏡』う
 つろうものは世の中の『人の心の花ならぬ』去りては『君が惠の
 深縁。いざや捧げん花も實もある桃の壽あら不思議やな水莖の。奇
 特現はれ忽に。花飛び散りてひてふの姿。雨を呼ぶとぞ見えにける
 雲にうつれば王母もともなひ。天の羽袖の風に飄り。降り来る雨

をうち拂ひく。光を放つ稻妻の雲に紛れて失にけり。

玉藻前

「それ秋津國の東に。那須野といへる郊野あり。實に三國に跨るゝ其の名を石にとりめしも。これぞ武勇のいさほしや。四季折々の花の香に。うつろふ色は藤つばの。ふちの紫梅壺の。梅の香も身ひとつに。かつぐ玉藻のまへ渡り。その花よりも月よりも。戀しき人の闇の内。闇の扇のつれなさに。恨よるべの姿。ものゝふの弓矢も神の守護の國。今ぞあらはす我が姿。班尼太子の塚のかみ異國の姐妃

「日の本へ渡り来りし白面の。金毛九尾の毛も逆立ち。怒りの眼は紅や。黄菊白菊亂れ咲。われも亂れて此處彼處。狂ふ姿ぞ恐ろしき。早時来りさらばぞと。夕暮深き村雲の。嵐吹き添ふ飛行の有様あやし恐ろし次第なり。

亂菊松慈童

「峰の初花谷の月。七百年も昨日今日。名をは彭祖と呼子鳥。覺東なくも唯一人。都の空を懸衣。夜半の嵐に梳り。旦の雨に髪洗ふ木の葉衣の綾錦。われから染むる秋の色。菊の一夜の夢に咲く。思

ひ出づるも恥かしや。實に古は宮中にて。錦の褥玉の床。君が情の
 言の葉に。露の契を重ね菊。いとし可愛も妹と背の。戀にも遙か十
 寸鏡のおろの妻戀ふ山鳥の。仇な假寐もつれなきを。末の白菊の玉
 かづら。人目の關は越えもせで。枕の科や亂れ髪。合今は深山に世
 を捨て菊の。雁のはつかの便も絶えて。菊の葉末に書く文字の。筆
 の命毛切れ果てもせず。吸むや流の菊の酒。あいもおさへもひと
 と菊の。合「秃菊とはませ垣のませたなりふり川竹の」縁に引るゝ名
 も可愛らし「戀の命は初時鳥」月の影さて空懐かしき「二度のあふ
 瀬は時雨の紅葉」見れば其まゝ顔に火か「高いも「低いも色の道。

「後は互に言ふことさへも。袖にわかるゝ留木の薫」君と我とは飛
 び交ふ蝶の。二つ離れたる比翼の車。ちらりちらり「袖
 や袂に「春ならで。胡蝶の夢か幻か「風に翼の白粉も。亂れくして
 糸の纏れや思の絆「花にあこがれ月に浮れて。待つに來ぬ夜は氷の
 地獄に。せめられ身をさる劍はあだに。明ゆく八聲の鳥鐘。火中の
 炎に苦しみて「くるりくるり日影の小車。われのみ物や思ひ顔。
 合思へば昔し懐しや。初春霞秋の風。四季物狂ひと人や問ふ。人
 の眺めも。合「袖にそよ〜吹く風を。戀風と思はんせ。オ、それを
 れ〜「誠々。合「心も懸る胸の闇。かなならずエ、月の夜に。御座ん

せつまがへさん。つまがへさん〜戀風と思はんせ。オ、それ〜
 誠 舎かさで逢ふ夜はナア。月の雲も面憎いとし。しんきな顔
 見たや。いとししんきのなん 舎なん情のそれが誠にてんと誓文わ
 が思 舎それが浮名の大立つとても。こちや嬉し 舎いとししんき
 の顔見たやいとししんきのなん〜情の、露や時雨やてんと誓文我
 が匂ひ。それが浮名の立つとこちや嬉し。散らぬ姿の乙女菊『も
 とより藥の酒なればし 醉にも犯されず。其身も變らぬ七百余才を保
 ちぬるも。この御枕の故なれば。いかに久しき菊の水。汲めや汲め
 〜盡せじと。菊かき分て山路の仙家にそのまゝ慈童は歸りけり。

戀良奇の掛合

上るり『蠅營なる狗荷と。韓非にのせられし。卷尾けんてい自ら。此
 身にうけて淺ましや 歐 我も北斗を拜しては。心の儘に姿をも。う
 つすや池の水鏡。かつぐ玉藻に梳る。其通力も忽に『蘭香の香の觀
 郁と薫に恐れ本性を『見るにこはさも忍ばれず。野干の形あらはせ
 し『はかなのわが有様や『野末の草の葉がくれに。萬の恨みの恨め
 しく。親の誓をうつゝにも夢にも忘れやるかたも。泣てあかして〜
 よ〜と焦れて燃る狐火は『ほむらと成て去りやらぬ。煩騰の犬如

何にせん。絆につなぎ纏はれて。伏て見寐て見執着の向去りやらぬ
 思により「我は化けたと佛を。慕ふにあまる口惜しさ報はんものと
 立よれば「毛衣さつと振亂し。眼鏡に息まきし寄らば喰はん勢に。
 ばつと飛び退き振返り。エ、甲斐もなき。涙の雨のはらくとはつ
 と。日に添ひてかゝる憂き事なき身をならば花を飾りて品繕ふて。
 「嫁入く里の子。難たてられしつぼりと。露のかごごを草枕。獨
 り葎の床の内「寐むるとすれと犬境の。ちやつと起立ち身をなる尾
 花「此方は尾を巻き覗ひ寄る「寄せじと啼れば飛び退いて廣志の劍
 「憤怒の牙「研立て「研立ていごみあふ親の別れの其の場より所定

めずろろくと懸し床しはさながらに「人間よりも百倍の。思ひ重
 なる胸の内「仇も報も白真弓。犬追物や「鼠畏かゝるも知らぬ輪
 回にひかれ「ひかれく「爾は言へ親の恨めしものと。菊をつとつ
 て打つてかゝれど「寄せつけず。貞女を守る張然犬。揚清季信が犬
 ととも。かくは非じと耳逆立吼れば「叫んで驅向ひ「追つ「返しつ
 その風情。去のふやれ我故郷へ戻ろやれ「その名玉をと立かゝるを
 頼賢やらじと引止むる「千枝狐が歸り咲き。姿の花や六の花。木毎
 の花の顔見世は。目出度かりける次第なり。

しのび車

「夫れ西山高うして。夕日も早く落葉時。梢の風に雪たちて。運ぶ時雨の宵闇に。神の御燈を尊とけれ。『稻魂の御社へ。通ひ車のわれからど。胸に思ひを深草の。昔を忍ぶ隠れ里。』老女の化粧もの凄き雲間をもる。月影を。見越が嶽や山里を。君に引れてそこはかどなく。車の許へ辿りつさ。『榻のはしがき幾夜さか。忍び車の戀衣さつ。』情もいつしかに。網代車のつれなさは。力車のちからにも。引に引かれぬ手車や。七の車に積み兼し。思ひをはして給れと。恨にし

める村時雨。『濡れによる身の傘に。』峰吹下ろす風の。音も烈しくばら。散は木の葉かあらしこか。『打てかゝるを身をかはし。』くるりくるりくるり。彼方此方へ飛廻る。風の手に乗ふ紅葉も。果は流る。谷川に。河鹿の聲もかれ。て。行術何處と立つや白浪。

鷺 娘

鼓吹。『安執の雲晴やらぬ鷹夜の。戀に迷ひし我が心。』忍ぶ山口舌の種の。鷺風が。『吹け共傘に雪もつて。積る思は泡雪の。消えてはかなき

懸路とや「思ひ重なる胸の闇」せめて哀と夕暮に。ちらく雪に濡
 れ驚の。しよんばりと可愛らし「迷ふ心の細流れ」ちよろく水の
 一と筋に。怨の外は白鷺の。水に馴れたる足どりも。濡れて雫と消
 ゆるもの「われは涙に乾く間も。袖干しあへの月影に。忍ぶ其の夜
 の話捨て」縁を結ぶの神さんに。取りあげられ嬉しさも。余る
 色香の恥がしや「須磨の浦邊で汐汲むよりも。君の心は取り悪い。
 さりとは實に誠と思はんせ」羅子の袴のひたさるよりも主の心が取
 りにくい。さりとは實に誠と思はんせ。しやはんにへ「白鷺の羽風
 に雪散しく」景色と見れどあたら眺の雪ぞちりなん雪ぞ散なん「惜

からの「戀に心もうつろひし。花の吹雪の散がうり。拂ふも惜しき
 袖笠や「笠をや「傘をかすならばてんくく日照傘。それへく
 差し掛けて。いざさらば花見にごんせ吉野山「それへそれへ句櫻の
 花笠「縁と月日を廻り来るく「車がさそれくくそうぢやへ。
 「夫れが浮名の端となる「添はれず剩へ。邪慳の刃に先立て。此世
 からさへ劔の山。一じゆの内に恐しや。地獄の有様ことくく。罪
 を糺して閻王の。鐵杖まさなありくくを等活畜生衆生地獄。或は叫
 喚大叫喚。修羅の大鼓は閉もなく「獄卒四方に群がりて。鐵杖振
 り上げ鐵の。牙かみ鳴らしはつ立くく「二六時中が其の聞くるも

「くるり追ひ廻りく遂に此の身はひしくく」
「羨み給へ。我が
憂身。語るも涙なりけらし。」

新曲かしくの柳

本調子「夫れ青陽の春の晨 千里も同じ 倉天津風 倉雲井に舞へる
乙女子の。姿をこゝに三つの糸「ひくや霞の細眉に。みどりの髪や
倉白妙の。雪の肌は 倉ほんのりと。誰が無理言ふた言ふた酒樓
縁「迦陵頻伽の聲清く 倉霓裳羽衣の曲の袖の 駉す扇の 倉ひらひ
らと「花か胡蝶か胡蝶か花か 倉夢か現と見む人の。いつか解けむ

輪柳の。解けてめでたく候かしく。

若葉摘

本調子「君に若菜をすゝむること。寛平延喜の御代に始り。天曆四年
如月にも女御安子のたてまつる。な々に数ぞふ十二種の。色くらぶ
なる若菜人「いく千代も變らぬためし妹と背の 倉睡みなづみて春
日野の。若菜の懸衣の。しのぶの亂れ限りなく。深き思を筒井筒「う
つり心と始めから。うき水莖の筆冴花。心根序にたちあかし。待つ
に甲斐なき偽りの。いつ逢ふ人のよすがさへ 倉舞うらみて片山雉

子。鳴く音にもゆる早蕨の。露に綻ぶ風情なり。鳥花の粉染の色わ
 けて。鳥紅梅殿や。鳥老松の。鳥緑の空に誓ひして。契り情のひと
 夜松。鳥薄雪消えて如月に。たちわたり舞ふ雲の袖。鳥和光の影も
 曇りなき。春日松尾の二つ神。分身威明の姿を現はし。供御をそな
 へて其の儘に。神はあがらせ玉ひけり。

松の緑

本調子「今年より。千度迎ふる春毎に。なをも深めに。松の緑か禿の
 名ある。二葉の色に太夫の風の吹き通ふ。松の位の外八文字。華麗

を見せたる蹴出し種。よう似た松の根上りも。ひとつ園の籬にもる
 べ。廊は根引の別世界。世々の誠と裏表。比べごしなる筒井筒。振
 り分け髪もいつしかに。老となるまで末廣を。開きそめたる名こそ
 祝せめ。

花見踊

「吾妻路を。合「都の春に志賀山の。花見小袖の縫箔も。合「派出をか
 まはぬ伊達染や。斧琴菊の判じ物。思ひくの出立ばへ。合「連て着
 つれて行ぞとも。合「たんだふれく六尺袖の。しかも鹿の子の合「

岡崎女郎衆 合橋に八ッ橋染ても見たが。ヤンレホンボニさうかい
 な 合「そさま紫色も濃い。ヤンレそれはさうじやいな 合「手先揃へ
 てさいんざの。音は濱松よんやさ「花と月とは。それが那の詠やら
 合「被衣眉深に北嵯峨御室。二條通の百足屋が。辛氣こらした真紅
 の紐を。袖へ通して 合「つなげや櫻 合「ひんだ鹿の子の小袖幕目に
 も綾なる 合「小袖の主の。顔を見たなら 合「猶よかる。ヤンレそれ
 はへ「花見するごとて 合「熊ヶ谷笠よ 合「呑むも熊谷。武蔵野でござ
 れ 合「月に兎は和田酒盛の 合「黒い盃閣でも嬉し 合「腰に瓢箪・合「
 毛巾着。酔ふて踊るか 合「よい〜よいやさ「武蔵名物月のよい晩

は 合「おかた鉢巻蝙蝠羽織 合「無反鋸角内つれて。こゝは手細に伏
 編笠で。踊れや〜 合「布の掲く杵も小町踊の 合「伊達道具よいよ
 い〜よいやさ。面白や「入来る〜 櫻時、永當東叡人の
 山。彌が上野の花盛り。皆清水の新舞臺。賑しかりける次第なり。

櫻 狩

「長閑なる頃も如月おしなべて。柳の糸も淺緑。吉野よく見し人は
 いざ。馴れし東の都鳥「大宮人もあこがる。隅田川原の春景色。
 曙染やほの〜と。霞か空か咲く花の。雲の中ゆく櫻狩「蝶鳥の

羽袖も薫る花の蔭。人の心も浮き立ちて。花を翳しの袂より。潜る
 燕の可愛らし。見飽かぬ空を行く雁の。誰がまつちやら向越し。憎
 い心ぢやないかいな「其の昔ありしも戀の手引草。誓も深き奥山に
 根ごして植し初櫻。色香を送る春風に。馬道越して通ふ駕籠。三枚
 四枚衣紋坂。早や大門と夕櫻。氣高き花の粧ひに。松の位の外八文
 字實に此の里の春の宵。桂男の俤も。霞める。空の朧月「初戀の
 花もの言はぬ習しに。思ひざしたる武藏野も誰が手にふれし盃の影
 にこぼるゝ愛嬌は。いとしらしさの花紅葉。涙も薄いもこき交せ
 て。青海猿若とりぐに。はやす羽織の曲舞は君が笑顔の半開と必

の駒や勇むらん「面白や花の友垣ひと群に。眺つきせぬ春遊び。尙
 いつまでも長唄の。道の榮を祝しけり。

都 鳥

本調子「たより来る。船の内こそ床しけれ。君なつかしと都鳥。いく
 よかこゝに隅田川。鳥往來の人に名のみ問はれて。鳥花の風。水に
 うかれて面白や。倉河上遠く降る雨の。はれて逢ふ夜を待乳山。あ
 ふて嬉しきあれ見やしやんせ。翅かはしてぬるゝ夜は。いつしか更
 けて水の音「思ひ思ふて深見草。結びつ解いつ。亂れあふた夜もす

がらはや後朝の鐘の聲 倉にくやこれなく明くる夏の夜。

彌 生

春の景色をうつしては。うたひ語はん若草萌えつ山々に。引ける霞
の其の下に。笑ふ櫻の可愛らし。御代の治まるしるしと。雲井に飛
べる鶴うれし。御狩は今日か飛鳥山。花の木蔭の小袖幕。弾く三味
線に舞ふ姿。俱に來よ舞はん「今も變らぬ江戸紫に。交る路考茶ゆ
かしけれ。そも市松は六法の。丹前羽織伊達に残りて偲び草「忍ぶ
春雨小梅の寮に。といく芝居の番附や。爐塞ぎすぎて二の替。女の

すなる舞まつり。何れ劣らぬ春を樂しき。

花 の 友

本調子「下總や武蔵の合ひと流れ。心も隅田の川上に。寄するは春の
友なれや 倉つさぬ眺の花の香を。茶壺につめし初むかし。變らぬ
色のいさほしに。飽ぬあそびのながしたて 倉たせし誓の行末は。
その姥口のふとん笠。ふたりしつばり嬉しい中を。誰が水さして替
服紗 倉捌さかねたるなか／＼に。思のたけの竹臺子。その折する
の末までも。月と花との戯れに。すぐるすさびの面白や「見渡せば

流れにうかじ一葉の。中の小唄の顔見たや。櫻がものを言ふならば
 さぞや情氣の種である。粹な隅田の水鏡。焦れあふたる舟のうち。
 合餘所の詠のもごかしや二上り君がまつ香の薫の床しさに 合戀
 の闇路の色ふかく。染る柳の瀬にうつる 合風の姿のいとしさに。
 いつか誠をあかしてそして約束かたき女夫石。はたで見る目の樂し
 さよ 合花のかすく敷ふれば。松は鷹。櫻はゆかし。粹な山吹桃
 椿。藤妍に風も長閑けし。

花 車

三下り「ひげやひげ」。姿もしもの花車 合白紅の染手綱。しやん
 と着なした。この風折の。烏帽子狩衣男舞「けふ今様の壽を。祝ひ
 かなづる三ツ扇。その舞扇手もゆたく。げに栴檀の二葉ぶり「冬の
 半ばに山里を見わたせば 合梢はしもか雪の花 合冬至の梅の色盛
 合薫床しき花の袖 合彼方へひらり 合此方へひらり 合櫻にま
 がふ雪景色「初戀の人目恥かし花紅葉。しのぶの山の下紅葉。うす
 いは厭上戀衣。結ぶ縁は神さんの。お媒人ではないがいな。今宵逢
 ふとの合圖はなんで 合妻戸叩かば誰そとも言はで 合あけて霜夜
 の難言も。たゞ心なき鳥籠に。いとゞ思の十寸鏡。合せ鏡の比翼紋

二より「玉垂の内や床しき御所車。それへく。筆に思を文車 雪車の
 それへく 合忍ぶ車の君と我。扇車や懸車 合くるりくくく
 るくく懸車。しほらしや「振込めく初雪に 合中に見事な花
 の槍 合振の袂に懸風が 合よれつもつれつ 合ちらくくく。と。
 合さんさ時雨にぬれく初て 合そろふ槍の手花の山。かざり立
 たる伊達なとりなり 合たいいつまでも此の舞臺。變らぬ花の顔見
 世や。鹿 繁昌變らじと。派ふ御代の里神樂。千秋萬歳萬々歳と。
 『豊にこそは舞納む。』

江の島

次第「筆も及ばじ江の島く。歩みも軽き余情かや 木蘭子唄「砂路遙か
 に見あぐれば。天女まします島蔭に。並ぶ妹脊や男山。いつも女の
 名にふれし。緑に目だつ額きは。うつる浪間の海士小舟。中に結び
 し魚の糸。人手に掛けて引く網に。かゝる拍子の演唄や二より「ぬれた
 ヨ袖なら思の淵ヨ。あけし真砂の敷よりも。しよんがいな。只いつ
 となく島の本木蘭子「先拜せんと岩清水。心住吉あら神の。石は蝦蟇
 なる形にて。蜘蛛とは蛙の言の葉は。げにも興ある案内の子等と笑

ふ門なる福石の。邊尋ねて通寶の。文字の徳を得たりしは。外に類
 の地震知らぬ。山とは更に事そへて『うごく心の月の影。忍ぶの亂
 れ亂れかゝりし村雲の。倉迷ひの空や兒櫻。咲くも咲かぬも白菊の
 しのぶの里に人間はい。思入江の島と答へよ。懸路の間はありがた
 さ。光にはれて影向の。岩ぞ神威のかたえなる『そも當社兩度の御
 祭は。本宮御旅所四神の旗。神幸其の日の己の刻に。龍窟よりも渡
 らせ給ふ誓固り、しき神の仕丁白幣。倉勢たつる獅子頭、神具寶行
 儀にそろへ。海岸峨々たる巖上を。桓々として殿重たり。笏にひい
 く磯邊にも。浪の敷の海青葉。倉蓬萊堂には鶴の舞ふ。此方は輝く

金龜山。げにあらたなる金銀珠玉。十分に積み重ねたる富貴の島山
 妙音菩薩の欄も松に。吹きつたへてぞ限なく。そのふし言の糸竹も
 すぐなる神の誓なるへし。

竹 生 島

『竹に生るゝ鶯のく。竹生島詣急がん』是は竹生島の參詣の者に
 て候。扱も神靈あらたにましゝて。島のわたりもいと易く。誓の
 船に乗り候本國于彌生半の海の面。霞わたれる朝ぼなけ。長閑に通
 ぶ船の路。うさ葉となご心かな。此浦里に住みなれて明けくれはこ

ぶうろくづの。敷をつくすや釣人の。誓の船に法の道「比良の根風
 吹とても。沖漕ぐ船はよもつきじ。旅の習のおもはずも。雲井のよ
 そに見し人も同じ小船になれ衣「あれ竹生島も見えたりや「船が着
 きて候。御上り候へ「不思議やな此の島は女人禁制と承り候に。
 あれなる女人は何とて参られ候ぞ「それは知らぬ人の申す事にて候
 「忝なくも此の島は。九生如來の御再誕。そりや言はいでも住の江
 の。松のひじやうも妹と脊の。そのあひ中は有るものを辨財天は女
 体にて。結ぶ縁の糸竹に。道も守りて祈りて新たなる。天女と現じ
 ましませば。女子に隔てなみならぬ。深き心の願事も利生は更にお

こたらず「何の疑ひ荒磯の。島松影のあま小舟。乙女の姿。忽ちに
 社壇の扉へ入るよと見えしが。又釣人も立歸り。波間に入らせ給ひ
 けり「實に〜かゝる有様に。信する心彌勝る。神の示現を松のか
 げ「御殿類に鳴動して。光り輝く日月の。山の端出づる如くにて。
 現れ給ふぞ忝けなき「抑々是は此の島に住んで臣を敬ひ。國を守る
 辨財天とは我が事なり「虚空に音楽数々の。花降り下る春の夜の。
 月に輝く乙女の袂。かへす〜も面白や「夜遊の舞樂も時過ぎて〜
 月澄み渡る海づらに。波風類に鳴動して。下界の龍神あらはれたり
 龍神湖上に出現して〜「光も輝く金銀珠玉。彼のまれ人に捧ぐる

けしき。有難かりける奇特かなく。

筑一摩川

「夫れ太曾の南面に。落合ふ水の筑摩川。頃しも秋の習にて。續く霖雨もや、晴て雨後の川水彌まさり。名にし大井の満水も。かくやと思ふ川の面矢よりも早き急流は。目ざましくも亦恐ろしき」扱も我慢の大傾が。臣下の諫小賢しと。水馬のためし魁の。名馬に策をあて給ふ。様子得たりと又助が。忍ぶ蘆原押分けて。立出る影もきらめきし。刃の光鋭くもざんぶと川へ入る間もなく「君の勇氣に

劣らじと。警國の臣が馬面をそろへ。乗入る大河遠淺を。上手の方へ半町あまり。登るとすれど水勢の。力に押れ一同に戻りては又大石の助によりて踏みとまり「渡る人馬も戦場の。修羅の巻に異ならず。危うかりける次第なり。

秋色草

本國子「秋草の東の野邊の忍ぶ草 合「忍ぶむかしや古ぶりに 合「住し里は夏草ひく。麻布の山の谷の戸に。朝夕むかふ月雪の 合「春告鳥の 合「あどわけて「艶めく萩が花摺の衣かりがね 合「聲をほに。あ

げて 禽おろして玉簾 禽端居の軒の庭帷 禽うけら紫葛尾花 禽
 去寐の夜半に萩の葉の 禽風は吹くとも露をだに。据じとちぎる女
 郎花 禽その曉の手枕に。まつ虫の音ぞ禽たのしき 『變態續粉た
 り。神なり又神なり。新聲婉轉す 二上り』夢は巫山の雲の曲 禽雪の
 曙雨の夜にうつすや袖の蘭香待 禽とめつうつしつ 禽睦言もい
 つかしいまの兼てより。言葉の眞砂敷島の道のゆくての友車。くる
 とあくとに通ふらん 禽峰の松風岩越す浪に 禽清極と琴のつま調
 へ 三下り』うつし心に花の春 禽月の秋風 禽時鳥 禽消えせぬ禽
 樂しみは。盡せじ盡きじ千代八千代 禽常盤燈籠の松の色 禽いく

十返りの花にうたはむ。

木賊刈

「面白や梢はいづれ一葉ちる。嵐や音を殘すらん 三下り」木賊刈る。
 其の原山の木の間より 禽磨かれ出る秋の月。露分け衣袖ぬれて。
 男鹿鳴く野の行末と其れは信濃路我は又。若いを養ふ樂しみに心を
 磨く種にもと 『いざや木賊を刈らうよ 禽今宵の月を友として。昔
 話の獨り笑み』昔ぢいと婆とがあつたとさ。爺は山へ柴刈に。婆は
 川へ洗濯に。互に跡を見送りて。山と河へぞ出らる。婆は尾上を

見やりつゝ。北山おろしの烈しくて。嘸寒からういとしやと。我身
 より尙爺殿の。身の上思ふ諸白髪。うち連れて急ぎ行く。おらが元
 氣はナア若い者にも 合いつかなく 合めつたにや負ぬ九十九折
 なるゑんじよの山路なりと 合いつかなく 滅多にや負ぬ。九十九
 折なるゑりくりゑんじよの山道なりと。足はしつかり腰をそらして
 杖いらぬ。浮世語となりにけり。

君の庭

三下り「牡鹿鳴く此の山里と詠みたりし。嵯峨野の秋の月の夜に。露

の千種を踏分て 合宿直姿の藤袴。駒ひきとめて休らへば夫れとし
 るべの松風に。通ふ爪音身にしみて。合はず音色の笛竹や「月の前
 の調は。夜寒をつぐる秋風。雲井をわたる雁がねも。琴柱に落る聲
 聲に本調子「想夫戀の曲は。比翼の翅を戀ひ。磐渉調の調は。連理の
 枝に通ふ「これはかしこき君が代にわりなき中のひとふしを。飄ふ
 も同じひと夜の君が。情にひかれて尋ねくるはの通ひ路に 合七百
 年の昨日今日、菊のさせ綿うちかけに。桔梗蒔萱女郎花「店清搔の
 音につれて。色香あらしふ出立ばへ。萩の錦がふくめる露の 合玉
 揃ひ 合末は離にせかれても。格子を覗く月影に。招く尾花の忍音

は實に面白き仙境なり。「豊年の今年はひつじ八束穂のかりほのいつ
るわたましに實入をほこぶ出来秋や。尙も千秋のたのしみ。とうた
ひ囃して祝しけり。うたひ囃して祝しけり。

黒木賣

三下り「わしが在所に風雅にいで。むくつけにねまるべいと。語ら
ふならば。嬉し甘露の桃や柿がぶらさがり。九十九疋の地意悪狼に
おつたてられても笑はれても。ねこんす惚れたも性根ぢやへ。黒木
買はんせ黒木召せ。鳥戀には八瀬の里育ち。軒の梁の床しるは。玉

だれ髪を取上げて。誰れに見せうとて夕化粧。わしが容貌は賞めも
せで。姿がよいの生際が。宵の口舌に無理なひとりごと「わしほど
優れた女子をば。嫌ふお前の氣が知れぬ。機嫌なほして君と我
俱におちよもの我が里を「兎角思ふようにナア浮世がならば。可愛
殿御と野の末までも。糸も繰ります機織虫よ。誰を松虫焦れてすだ
く。つれれさせてふ馬追虫の永き夜すがをなき明す。草葉にす
だく鈴虫の。ふるやふるの。合三上り「振やれお振やれ輕男の。又
ともない。一代奴。ありやんや。こりやんりや。何でも
せ。合國で評判男山。合御國界の松の木。下り枝危い。合お

腰をかゝめてく。倉ふれやれく其の月雪や。花の館見事にさ。
 倉ひらいてさ。見事にひらいで振もよし。ひかば靡かん松の木越
 よ。振さ 倉振さ振れく。お先揃へて殿はしよちいり 倉だめな
 事はし云はしやるな 倉型は關東さへまかるべいちやなやれサナ
 主さ別れちやなア。伊勢路へあんちちくだぶんぬきやるさ。池の
 どん龜ならむぐるべいとハヤレサテ。實だんべいく 倉いけすか
 女郎衆の旅立ちさ。主さ別れちやなナ。伊勢路へあんちちくだぶん
 ぬきやるさ。池のどん龜ならむぐるべいとハヤレサテ。實だんべ
 いく 倉かけ奉る實前に。名筆名畫の徳は目前。今日の前に 倉

外に中村人は歌右衛門。

紅葉狩

物思ふ立ちまうべくもあらぬ身の。袖うちふりし心まで『うつらふ
 秋の色みえて。此の身を何とゆふまぐれ 倉時雨る空を眺めつゝ
 浮れ出でたる道の邊の。草葉もともに下紅葉『夜のまに露や染めぬ
 らん『面白や頃は長月末つかた。四方の梢もいろくに。錦彩さる
 山々は。花の吹雪のそれならで 倉五色の雪と降る紅葉。分けつゝ
 行くか登克夫の。矢狂心の梓弓。ひくや知るへの駒の足。涙に川の

流れ絶えせぬ紅葉葉を。渡らば錦中絶えん。時雨を急ぐ紅葉狩「見捨て玉ふかつれなやと。袂にすがり止むれば。流石岩木にあらざれば。心弱くも引止められて。所は山路の菊の酒。汲むや流のうき身にも。いと可愛のよい殿御ぶり。ほんにお前を誰が抱いて。ぬるでの紅葉色見草。他處の戀路のねたましや「うもや誠が露程あらば二世も三世も神かけて。忘するゝ隙はないわいな「深い縁しも月に雲。花に嵐の戀すなる。月の盃さす袖も。雪をめぐらす舞の曲「秋の木の葉の色に出し。紅葉踏鹿惜いといへど。戀の文かく筆となるかはゆらしいちやないかいな「秋の千草の色に出し。菊と薄は中よ

いけれど。露がしらせて濡を知る。可愛らしいちやないかいな。ア、うらやまし「今まで爰に色ある女。忽化性の形を現し。紅葉の梢も火炎となつて。枯木木の葉もさら〜。めざましかりける次第なり。

四季の山姥

「遠近の生活も知らぬ山住居。我も昔は流の身。狭まき庵に見渡せば春は殊更八重霞。其の八重桐の勤の身。柳櫻をこき交せて。都ぞ春の錦着て。手練手管の客をまつ「夏は涼しの蚊帳の内。比翼の産

に月の影。秋はさながら様先に。三味線ひいてしんき節。髪かみの亂みだれ
 を簪かんざしで。かき上げながら墨算すみざん。眠ねむる禿かぶに無理ばかり。ほんに辛つらいち
 やないかいな「同じ思おもひは鳴なく虫むしの。松虫まつむし鈴虫すずむし響虫ひびくむし。馬追虫うまおひむしのやる
 せなく何なんれの里さとに衣打えうちつ。よくも合あせたものかいな「上うり」ふりさげ
 見れば袖そでが浦うら。沖せきに白帆しろほや千鳥ちどりたつ。蛭しゅうとるなる様さまさへも。あれ遠とほ
 浅あさ。深標ふかじろし。松棒まつぼう杭かのがれ来て。ませた鳥かこすが世よの中なかを。阿呆あほうく〜と笑わら
 ふ聲こゑ。立たてたるしびにつく海苔うめずしを。とりく〜廻かへる海士あま小舟せなわ。うき精ま
 に見みゆる安あ安あ上あ總あ三あ下あり「冬ふゆは谷間たにまに冬籠ふゆかごる。まだ鶯うぐいすのかた言ことも梅うめの
 苔つばきの華はなかに。雪ゆきを頂いたく草屋くさやの軒端のきば。あだな捨風まつかぜふき落おて。ちりや〜

ちり〜〜〜バツト散ちるは小蝶こてつに似にたる景色けしきかな「アラ面白おもしろの
 山やまめぐり。ごつこいやらぬと取手とりての若木わかぎ。此方こなたは老木おきなぎの力業ちからわざ。中なかよ
 りふつとねち切る大木たいぼく。かけり〜〜〜谷間たにまの。谷たにの庵いほに晏然あんぜんと。其そ
 のまゝ其處そこに座まをしめて。幾年月いくとしつきを送おくりけり。

常 磐 庭

「そも〜〜〜嚴島いつくしまの御社みやしろは。人皇じんろう七十四代ななじゅうよっぺだいの御宇みやうかよ。再建さいけんありし
 宮柱みやはしら。幾百歳いくひゃくさいか白浪しらなみに。禽かみ敷しきの灯火とうしや照あり渡わたり其そのの面影おもかげを吾妻あづまなる。
 鳥とり眺ながめは築地つくじ海原うなはらの。南みなみは蒼海そうかい雲うみにつゞき。倉くら遠山とほやま遙はるかに薄うすがすみ

合「千船百船行き通ふ。春の曙 合「不二の雪。長閑に匂ふ朝日影。
 三下り「仇と懸とを空せ貝 合「顔は恥かし紅葉貝。撫子貝の其のお姿
 をいつか忘れん忘れ貝 合「顔は恥かし紅葉貝撫子貝の可愛らし
 しくる沙に漕ぎ来る三下り「床しき船の青簾 合「音緒も高さ高輪に。
 合「なれて鷗の 合「三つ 合「四つ 合「二つ 合「六つむつまし竹芝に
 合「見えつかくれつ沖洲の蘆に。翼すいしき夕まぐれ身に入む頃は
 立秋の「苦屋の煙隈どりて。繪島が崎や明石海 合「須摩の浦邊で沙
 吸む海士は。しんさらしいぢやないかいな。よい〜〜〜よい
 やさそれへ「こゝは小濱の月をめて 合「霜をかさねて打つ砧「はつ

冬の 合「板屋を叩く玉霰 合「音もさむけき 合「閨の戸を。さうでな
 ぐさむ友千鳥。ちりやちり〜 合「ちり〜はつと夜半の漁火四ツ
 手綱。世わたる業のしなくは。言の葉草の及びなき本調子「たい此
 の庭は年毎に。松の緑のおひ茂り。四季の折々風景は辨財天女の御
 めぐみ。禮壽圓満限なき 合「舞の秘曲の面白や「浪の鼓に笛竹の。
 十二の律を三筋の糸に。調べとくなふひと節は。春夏秋冬樂しみの
 千代に萬代祝しくて。

時 致

「去る程に曾我の五郎時致は。不俱戴天の父の仇。討んずものことたのみなき。彌狂心も春雨に。濡れて廓の化粧坂。名うてと聞し少將の。倉雨の降る夜も雪の日も。通ひ／＼て大磯や「廓の諸譯のほだされ身く。誰れにひと筆雁の傳手「野暮な口舌を返す審「粹な手管につい乗せられて「浮氣な酒に宵の月。晴れてよかろか晴ぬがよいか。兎角霞が春の癖「いでオ、夫れよ我も又。いつか晴さん父の仇十八年の天津風。いま吹かへす念力に。逃さじやらじと勇猛血氣。その有様は牡丹花に。翼ひらめく小蝶の如く。勇ましくも又健氣なりニ上り「藪の鶯氣儘に鳴いて。羨しさの庭の梅。あれそよくと春

風が。浮名たゝせに吹送る。堤の薫草は。露の情に濡れた同士。色と懸との實比べ。實浮いた仲の町よしやよし「孝勇無双の勳は。あら人神と末の代も。恐れあがめて今年また。花のお江戸の淺草に開帳あるぞ販はしき。

菊 壽 の 草 摺

三下り「勢い和朝に名も高さ。曾我の五郎時致が逆澤淵の鏡てふ。裳裾にすがる鶴の丸。素袍の袖をかき撫で。とめるは鬼か小林の朝比奈ならぬ優姿。女の燃れる黒髪に。ひかれて止まる心なら。やら

じと引は時致は日頃の本望父の仇。妨げなすなど突き飛ばし。廓の
 洒落とは違ふぞよ。放せとめた「とめてよいのは朝の雪。雨の降る
 のに往ふとは。うりや野暮ぢやぞへ待たしやんせ」合起請誓紙は嘘
 かいな。嘘にも洒落にも誠にも。他所に色ます花眺め。そしてたま
 してそれくく其の顔で恐いこと言て腹立てさんす 合「そちら向
 ひて居さんしても。顔見にやならぬ末をたのみの通ふ神」かよはさ
 少將朝比奈が力は素袍の袖添へて。互に劣らぬ有様は。貴賤上下お
 しなべて。感せぬものこそなかりける。

ポケッツト藝者

明治四十四年八月十日印刷
 明治四十四年八月十五日發行

東京市日本橋區若松町四番地

編輯者 湯淺 兼 策

東京市神田區松住町五番地

印刷者 菅井十一郎

東京市神田區松住町五番地

印刷所 礎文社

者圖トツケ*



(定價廿五錢)
 (郵稅金四錢)

發行所

東京市日本橋區若松町四番地
 電話浪花四八六二
 東京一八〇六
春江堂書店

ポケツト文庫

村田天嶺著
家庭講話 ニコくお伽ばなし
定價金二十五錢

園部紫燐著
坊ちやん新お伽噺
定價金二十五錢

園部紫燐著
家庭講話 武士道お伽噺
定價金二十五錢

園部紫燐著
家庭講話 お伽夜話
定價金二十五錢

流行歌曲
ポケツト 藝者
定價金二十五錢

新派舊劇
聲色十八番
定價金二十錢

266
406



東京

春江堂

菱川